

ぞ人慎まざらむや。此の生空しく過ぐさば、後に悔ゆとも益無し。暫爾の身詎にぞ眉に存たむ。泛爾なる命孰れか常に恃まむ。既に末劫に入る。何ぞ忞めざらむ。噫然言れ惻ぶ。那で劫の災を免れむ。ただし衆の僧に一搏の食を資施さば、善を修ふ福に当来の飢饉の災の苦に逢はず。一日の不殺の戒を頼持たば、道を行ふ力に末劫の刀兵の怨の害に値はず。昔一の比丘有り。山に住みて坐禪し、齋食の時ごとに飯を折て鳥に施す。鳥常に啄み効ひて、日ごとに来り候ふ。比丘齋食し訖りて後に、楊枝を嚼み口を嗽き手を洒ひ、磔を把りて翫ふ。鳥雛の外に居る。時に彼の比丘、居る鳥を瞻ず、磔を投げて鳥に中つ。鳥の頭破れ飛びて、すなはち死にて猪に生れ、猪其の山に住む。彼の猪比丘の室の上に至りて、石を顔し食を求る。石徑り下ち比丘に中りて死ぬ。猪賊さむと思はずして、石自づから来りて殺す。無記にして罪を作らば無記にして怨を報ゆ。何にいはむや、悪しき心を発して殺さば彼の怨の報無からむや。惡の因を殖えて怨の果を報ゆることは、是れ吾が迷ふ心なり。福の因を作りて菩提を鑑ることは、是れ我が痛れる懷なり。羊僧景戒、学ぶる所はいまだ天台智者の問術を得ず。悟る所はいまだ神人弁者の答術を得ず。是れなほ螺を以ちて海を酌み、管に因りて天を闌る者のごとし。伝燈の良き匠にあらずして、強

ひて訂斯の事を瞻る。轍を淨き刹に剋み、心を覚れる路に奔らす。遠く前の非を愧ぢ、長に後の善を祈ひ、奇異しき事を注す。爾に言提流に、手を授けて勸めむと欲ひ、足を濡して導かむと欲ふ。庶はくは地を掃きて共に西の方の極樂に生れ、巢を傾けて同じく天上の宝堂に住まむとねがふ。

法花經を憶持てる者の舌曝れる嚙護の中に著きて朽ち

ざる縁 第一

諾樂宮に大八州国御めたまひし帝姫阿倍天皇の御代に、紀伊国牟婁郡熊野村に永興禪師とまうすひとと有す。海辺の人を化へたまふ。時の人其の行を貴びたてまつる。故に美めて菩薩と称す。天皇の城より南に有すが故に、号けて南菩薩と曰す。爾の時に一の禪師有り。菩薩の所に来る。持つ所の物は、法花經一部字を細く書き卷の数を減して一卷と成して持つと白銅の水瓶一口と縄床一足となり。僧常に法華大乘を誦持ち、之れを以ちて宗とす。一年余を歴て、別れ去らむと思ひて禪師を敬礼み、縄床を奉施りて語りて曰さく「今は罷退りて、山を展り伊勢国に踰えむと欲ふ」とまうす。禪師聞きたまひて、糯の干飯を二

する。第三の時期には人の寿命は次第に減少し、寿命の増減がくりかえされて、第二十の時期に寿命は増大し、住劫は終末を迎え、次に壞劫に入る。人の寿命の増大する時期を増劫といひ、減少する時期を減劫という。減劫の末期を「末劫」といふ。本書では舌内人声音は「ちで表記した。『まうちこふもその例。類似音を示すならば、マツコフ。』

三 減劫の末期の人の寿命が十歳のときに、刀兵災が七日間、疾疫災が七月七日間、饑饉災が七年七月七日間、おきる、とされた(阿毘達磨大毘婆沙論・三三四、俱舍論・十二、阿毘達磨順正理論・三十二)。壞劫におきる火・水・風の三災(大・三三)に対して「小三災」とよばれる。

四 阿毘達磨大毘婆沙論・三三四、俱舍論・十二、阿毘達磨順正理論・三十二、などに類似の文がみえる。

五 四分律行事鈔・中ノ一に「如經中頭陀比丘、不覺殺生、彼生命過墮野猪中、山上攀石、不因崩下、還殺比丘」とみえる(攷証)。

六 原文「即死」。死ぬと同時に、の意。

七 善でも悪でもないこと。下文によれば「惡心」の無いこと。

八 啗羊僧。戒を破ることはしないが、鈍根無慧なので、何が罪で何が罪でないかを正しく認識できない僧(大智度論・二)。

九 智顗。智者大師。隋の開皇十七年(五九七)に六十歳で歿。伝に灌頂の隋天台智者大師別伝がある。元曉の涅槃宗要に、四宗と五教とに関して「天台智者」が「神人」と問答したことを述べる。七代寺年表には天平五年(七三三)に「普昭、從唐天台教門持来」とみえる。

一〇「是猶以螺酌海、用管闌天者耳」(涅槃宗要)。

二 親切に教えてやらなければならない人々。

三 言提は言提其耳(毛詩・大雅・抑)にもつく語。その人の耳に口をつけて懇ろに教えたとす意。「言は、ここに、の意。真福寺本訓釈「言提美、比支天クキ乎か(師不留)流トモカラ」。

三 原文「授手」。救援する。三 原文「濡足」。溺れる人を救う(後漢書・崔駰伝)。

四 原文「掃地」(傾巢)は、ことごとく、の意。

五 兜率天宮。弥勒菩薩の居処。

第一縁 前半部が今昔物語集・十二ノ三十一に書承。

一 孝謙天皇。七五八年に淳仁天皇に讓位し、七六四年に重祚して称徳天皇。「帝姫」は聖武天皇の皇女であるがゆえの称であらう。中国では十二世紀に公主を「帝姫」と称することがおこなわれたが、古例は不明。松浦貞俊によれば「みかど」のひめみこ。三 宝給・東大寺切の「帝き」。「帝姫(テイキ)」により、「ていき」と音読しておく。七 今の那智を含む熊野川河口一帯の海岸(日本歴史地名大系・和歌山県の地名)。

八 一十巻二縁。東大寺要録・五に、宝龜元年より四年(七五七)まで東大寺別當をつとめた律師永興がみえ、三 国弘法伝通縁起・中に良律師永興がみえ、三 国弘法伝通縁起・中に良律師が弟子として華嚴宗を専らに修した、とされるが、本説話の永興とは別人か。統紀・宝龜三年三月六日条に「十禪師」のひとりとしてみえる永興が天平宝字二年(宝龜八月九日興福寺三綱牒に「上座」としてみえる永興と同人で、本説話および下巻二縁にみえる永興であらう。

九 行基菩薩(中巻七縁)。「金鷲菩薩」(中巻二十一縁)、などの例があった。

三 中巻二十一縁の賛にも、天皇との位置関係

斗春飾ひ、之れを以ちて師に施したまふ。優婆塞二人を共に副へ、使に遣りて見送らしめたまふ。是の禪師、一日の道を送られて、法花經と并に鉢と干飯の粉と等を以ちて優婆塞に与へ、此より還らしむ。ただし麻繩二十尋と水瓶一口とを以ちて、別れ去りて匿る。二年を逕て、熊野村の人熊野河の上の山に至りて、樹を伐りて船を作る。聞けば音有りて法花經を誦む。日を累ね月を逕て、なほ読みて止まず。船を造る人經を読む音を聞き、心を發し貴びて、自が分の糧を擎げて推ね求むれども、形色を瞞ず。故に還りて居る。經を読む音、先の如く息まず。後に半年を歴て、船を引かむが爲の人、山に入りて聞けば、經を読む音なほ止まず。怪びて禪師に白す。禪師怪び往きて聞きたまへば実有り。尋ね求めて見たまへば、一の屍骨有り。麻繩を以ちて二の足を繋ぎ巖に懸けて、身を投げて死にたり。骨の側に瓶有り。すなはち知る、別れ去れる禪師なりといふことを。永興見て、悲び哭きて還りたまふ。然うして三年を歴、山人告げ知らせたまつる、經を読む音常の如くして止まずと。永興また往きたまひ、其の骨を収めむとして髑髏を見たまへば、三年に至りて其の舌腐ちず。宛然生有なり。諒に知る、大乘不思議の力と經を誦み功を積みたる験徳となりといふことを。賛に曰はく「貴きかな、禪師、血肉の身を受け、常に法華を

誦み、大乘の験を得、身を投げ骨を曝りて、髑髏の中に著きたる舌爛ちず。是れ聖にして凡にあらず」と。また吉野の金峯に一の禪師有り。峯を往きて行道く。禪師の往く前に音有りて、法花經と金剛般若經とを読む。聞きて留り立ち、草の中を排開きて見れば、一の髑髏有り。久しきを歴て日に曝りて、其の舌爛ちずして生に著きて有り。禪師取りて淨き処に収め、髑髏に禱りて言はく「因縁を以ちての故に、汝我れに値ふ」といふ。すなはち草茸を以ちて其の上を覆ひ、共に住みて經を読み、六時に行道く。禪師の法花を読むに随ひて、髑髏も共に読む。故に彼の舌を見れば、舌振ひ動く。是れまた奇異しき事なり。

生物の命を殺し怨を結びて狐と狗と作りて互相に怨を報ゆる縁 第二

禪師永興は、諸案の左京の興福寺の沙門なり。俗姓は葦屋君氏、一は市住氏と云ふ。摂津国手嶋郡の人なり。紀伊国牟婁郡熊野村に住みて修行ふ。時に彼の村に病者有り。是れを禪師の住める寺に将来り、禪師を勧請へて病を看

に関心をよせた記述が存する。
三 妙法蓮華經の文字数は六万九千三百八十四とされた(下巻三十五縁、三十七縁。七巻または八巻に調卷することが多い。一巻はめづらしい。遊行する僧のためのものである。)
三 「白銅」は、銅とスズの合金。梵網經・第三十七輕戒にあげる頭陀僧の常に隨身すべき十八種物の中に「瓶」がみえる。
三 携帶用の坐臥具のひとつ。身体の接する部分が細製。頭陀僧の常に隨身すべき十八種物のひとつ。
三 糯米を搗き篩ひ、水で洗浄し、煮て日に晒し、さらに搗き篩つたもの。携帶食。水に浸して食べる。

一 頭陀僧の常に隨身すべき十八種物のひとつ。
二 麻(①)製の繩。「尋」は長さの単位。
三 船は山中で造られ、完成後に引き下された(播磨國風土記・讃容部。熊野は船の産地で、熊野舟(②)万葉集・十二・三三三)。真熊野之船(③)万葉集・六・四四四。真熊野之小船(④)万葉集・六・二三三)。熊野諸手船(⑤)書紀・神代下、などがみえる。

四 誦經して居る人に布施しようとして。
五 山から引き下す時には船の前部から引っぱったが、引き下す速度や方向を調節するために、船の後部にも綱をつけて逆方向へ引いた(万葉集・十四・三三三)。
六 鳥に身体を施すための捨身行か。

七 本説話には、時の経過が詳細に記述される。へ法華經を誦した者の舌が死後にも腐敗することがなかつた、という説話は唐代以後さかんにおこなわれた。隋代の旌異記あたりが古例か。法華經との関連は無いが、大智度論・九には、

阿弥陀經と般若經とを誦していた比丘の舌が火葬にも焼け残った、という説話がある。
八 そのような例にあること。

二 金剛般若經を誦した者の舌が死後にも腐敗することがなかつた、という説話は、孟献忠の金剛般若經集驗記にも段成式の金剛經鳩異にもみえず、太平広記に至つてもみえず、それはどきかんにおこなわれたものではない。ただし大智度論・九には誦般若波羅蜜故、舌不可焼とみえる。

三 「高燥処」ならざる所に葬られた死屍が「高燥処」に移葬されて安樂を得た、という説話の系譜につらなる。一上巻十二縁。「宜遷置淨所」設齋供養(統高僧伝・二十八ノ二)。
三 因縁があつたので、あなたは私に出会つた。前生での因縁を想定しての叙述であるが、前生での因縁の具体相は述べられない。

四 草庵をかまえた。

五 一上巻十三縁。

六 纓始発し、此之臂舌、一時鼓動、雖無二響声、而相似説誦(統高僧伝・二十八ノ一)。

第二縁 下巻一縁にひきつづき、永興にかかわる説話が提示される。

七 下巻一縁。
八 氏が葦屋・姓が君。本説話での狐との深い結びつきより推測すれば、後代の葦屋満満はこの氏の出自か。

九 大阪府箕面市、池田市、豊中市、吹田市あたり。
三 永興をその一人とする十禪師について、続紀は「或看病著声」とする(宝龜三年三月六日条)。